



新茗石波集
七

^ 13
115
7





新著聞集

殃禍篇第十四



唄貪老婆火車個去る

妙嚴寺の僧馬とるる

日蓮学僧活るがう天狗とるる

邪見の鬘母不孝二娘

聖貧富人成しし他報とるる

犬とるる——現報

人とるる——と強し斬るる

橋慢の織屋機糸割截

嘆火空とらる

聖貪夫婦とらる犬とらる吠

非道姪暴親とらる夫婦

劫盜遠く去て逐ふ刑とらる

鶏乃毛び了生す

頭了鳥乃嘴と生す

級生の現業無根乃取とらる

楊枝咽了了らるらるらる

貪嫉締りて殺して成す

犬少久去誤て娘とらる報す

逆風家入貪嫉首とらる

賊夫鬼とらるて首とぬく

産婦恩とらるて熊のおく害す

梅深吉素の積悪

狐の耳口とらる根刺の子とらる

厚のね毛とらるぬきとらる

野男三竹口毒とらる害す

非理に牛でけうい角に觸られて死す
不孝の男士は尸屋に賣る
他財を孩毛して後自害して死す
貪財の嫁娘は後刑で死す
父を殺し一屠滅の境に墮る

大村因幡の者飛つきて河村海へ是れは妹
の處にあらう不審にありし浦屋の人とて
立所なきしうは是れ二人、恥ぢるに
まゝのさやを向ふと取そは辱むの者ありし

慳貪老婆火車はくも去

大村因幡の者飛つきて河村海へ是れは妹
の處にあらう不審にありし浦屋の人とて
立所なきしうは是れ二人、恥ぢるに
まゝのさやを向ふと取そは辱むの者ありし

物本屋の母は、
便了、
連ぢ、
誘ひ、
十、
リ、
人、
野、
妙、

妙嚴寺の僧馬とらる

三河豊河の妙嚴寺の傍は、
い、
後、
だ、
し、
し、
現、
あ、

日暮、

洛陽の東松が峰より日蓮宗の寺ありけし上人の如
の人ありて門徒も上人分の聖所ありし師
煩て遷化せしが比より何となく
れあふを物すとて看方の面くゆきし
しよ不意とき何なり異條終そとて四方を吃と
えざる眼がやき又何く果なくちり左右
ぬぐい生て圍より走り出て標をなむに女と
しよじよの如意が嶽より飛出り女あり成
上界の上人五人とて宗昔とありし中に

浄土より指し成て名を長城と何とぬ
るありしと多くの人と念仏とてめ
人の心よりけしとて舌と推しおれ
ぬとに上人の眼のゆきしや
り

邦見の鏝母不孝の二娘

武州松橋より一里ありし西戸田に鏝の女
二人ありし姉ハ女衆ありしとて
十八歳ありし保也の五女ありし
妹娘母と

んくもあ擲し一多師うとて伝帳の内に
置る候ししう一も天候よあきうり大に
まうに陣雷あらうまの女やうりあき
うあきあゆみえうりおそれやや
婦も不孝うて朝夕食物もあきくに喰せ
はくくあしと筆やうりそ下人ハ跡
出し書み候とそよとて去りておれ
姑一りゆりせし母候し喰き候娘帰
又し憎きうりうりて走りゆくも奪う

あきらしりう母ハ煩い君ありおほく秘
しひおあきうりあを投し筆も頓て様
てにうんとてうりへ娘何しあきと
あのみちやのきき諾てあしし母ハ身
又成て頓て娘一あし候し筆も頓て流
してあき候言しうはあ志を
あきあきしきと取てあきうり
あき母ハ則あぬ娘もあき失せし
豊食富人あしと飽報と

京新町通出水止町一太ふまや代家として
大福長者なりはひく 腰負し無情上
世人眉をひそめりり 何れも何れ行しと
食部千人集りきりり 呼を台せくも人
えんはらと愛しりしをこく家の主人なる大講へ
多狭上と下へ入るもかくつれ大徳へ
二雲へぬも疾くもくも食ともあまの
何れもはびやまらちくものばるるに
とりのぬれりりて彼者方海へりし中陰上

近き一頼のゆかりに差議の廣はるまゝと彼れ
この枕上より立りばりきものりにあしお
はきりて比のまゝににりて吾れり合もり
比より蛇さつくと何やら車望の中に輸入て
かくとあはれりり 何れも何れ行しと
煙藁とまらりりり 何れも何れ行しと
おしりりり 蛇と忌よいきて何れりり
吊いあるとらん 何れも何れ行しと
犬とつゆり 何れも何れ行しと

養生下野の多く家ま塚千変と仕の勤を
養匠の市ありと云合せと人の秘蔵し
犬と報しとくしりし二日めらりと飯と場
何事とくしひ東と重の下に寐して誰の人
巧まバ犬れとくしりし中やとくしりし
了れ死しりしりし市ありとくしりし
しと後はなとくしりしりし

人を報しりしとくしりし斬ふあり

京大五區の中葦村しりし頃城町ら何よめ

者やん此切了色ありとのら十四のゆて丹
る原山了と人と巧しまりと刀服給乃益と
中よりある人新刀ハ是なりと此京の市あり
中より男とくしりしと切ありと切ありと
よせの世よめの討きし者のはかりし人合と
すく多頓てよめ不と新へ終く首と切ら
しりし

橋慢の織屋様系新截

五區や下五賣下町丹後ヤ佐とくしりし者

絹屋きぬやとして作りしお金のついでにきぬや仲より
 にくし絹きぬとくさぬくさぬぎく内談うちだんするを仲
 小座こざて丹後たんごの人とほりしお金とりし
 多おほで買かひりしもの仲より者も却かへり候まはり
 了つひ追おそうきよとじしししお金に候まはり
 了つひハ機うり三千四せんよしとる所時機うりの多おほ君きみと鶴つる
 とぬりた多おほくの聖朝せいしやうより一機うりの多おほり
 切きりし誰たれもきぶ業わざとく事こと議ぎしとれた文ぶん
 證しるし抄しやうもりていくのち毎日まいにちく切きり

後のちハ廿四にじよ機うり抄しやうに切きりしハ松まつが時ときより日蓮にっぜん宗しゆ
 の上人じゆんじん事ことりてさくしハ新にい禱たうしとれ先まへの漢かん
 もなりしハハ天あま台だいを言いふやありし
 了つひハ因いん波な業わざ所の機うり抄しやうとまのて七日にち加持かぢし
 ちれば件けんの切きりしやとぬぬ八日やっぴつして新にい禱たうし
 ちれば又また切きりしとある人ひとのよき今いま夜よの身み
 やありしハ皆みな嬌きやう慢まんのせししハ災わざひのちのち
 了つひ細こまの鶴つるの事ことしハ思おもひしし了つひ受う宿しゆく候まはり
 了つひしハ言ことばをのちとせやせ

なつしし貞享二のには丹未旬了り禱僧意りて盃
とて一の中らう無きむらうのふれハ一日の片に
四じびまでまじしやど一度のしうへもせしう
既言言よわのひーうと一夜の噂させしあつて
！一込のわうく罰くもけうあめて遂に過す
し禱僧さんあつてしりーうはや言ハ一町
をり禱してはしーせん不許みて家りしうは
此者ハ後世のいふにししつて類て修業して
此はの焼うあしゆくちーの後のいよく此家の

人の兄なりし夫婦ハ故に在衝の者人たつた
今畜するうねらゆりしとつては焼はつてあま
しり勢をくしりれむ不意くたのひなばりして
しくつてハ焼やどそつてしとつてあつてもなりし
まどを由るき縁傷乃也行つて驚顛せしめど
はぶやきあぬを今一症つてあつては強よ云け
はくちうしびあひしーあつてしと不思議々夫婦
つり之言音通せししてまき大の吠る声しん
あつてはまきまきあつて焼たどろきしりしに

ハ何れハ一はれれらん 疎ももろくしーそれより
遠近の人ニつづく 毎友門上まらちのくまを
つづりしとらん

非道姪暴親子夫婦

大坂上町の市々町之隣家の女ありしある寺の
隠居一なる僧あり一なる還俗一して流し親
をれて夫婦とつりし 後家を建てり 娘に言
てつりし容儀まごひをりしうば入りやいの
継父とてつりしとまらしく云つりしとつりし

親と名の付くらん人 跡と字をにあまる古入る乃
其の身をさうらがる程に心憂はれとそおし
つりしとそれ家の傍屋に空月とてつる心者の
しよとく心でつりし親のつくつりしとて
あつくの多りてつるてつる家とまのま何れ
をり親んと云かりし 最後の上三郎とてつる
者つりしてつるつと継父とてつるつとつる
つりつとつるつと親の不承はまのつりて大
つとつりつとつるつと空月ハ出家の不承女ハ出家

やせりし種れがうまうて夫婦より首と劍
りき道頓堀の平日寺乃あす晒さるしと見物
乃中より相も美女うま口と吸登しと云ふ
常の乞食とも思はずべしと祈るをひしと頼て
即の者めりめて公儀了り出しられん則籠
舎せしとくやい吾が真父も出家してかくし
女と出来しと娘有り空胸も親ハ出家して
りしと也海しに亘り因果の初めは海し
るしと下ヤとくと人と思はるし

故盗遠く去遠く刑にせむまに

元禄元より京三條河原洗地に都筑惣と云ふ
の洗地を抜井と給とありしと云ふ
思ひしとく穿識ありと云ふ給ハ質ヤにあり
と云ふハ三宗通り少僧の髪張りて仔細ぬ多
の者洗地に入まり質入ると云ふと云ふ物
月代の代かきしと云ふ物人ハ何れも者
ヤと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
舎せしと云ふに物見の都筑惣と云ふと云ふ

先づかゝて越前のあつて山賊よりさうさういふ
所へ我ハ悪作やく親の勘當として身の上
なまゆへし改せおぼせし上ハさうの同類
しりぬりぬりしと監獄も納得してまね
りしバ我館わして謀ひある所を裏面くれし
ごらんとすんとお中に一人我吉の系を
公儀の鉄炮でぬすれし日本あつた澄ゆへ
これ等のちぢハ余りな海でまじり自慢せし
あつたの後道に者といふもあつた系

のあつたゆへに我々のあつては
左もわづか各のあつてもあつたといふ
バは彼ゆへししとまよ上りなまゆへし
右のどんと新へしは斜りしは
まぬい越前よゆせつしは
黨ハ越前よて宰よし鉄炮
庶殿七しとまゆへしは
あつしとら

鶏の毛尻ふす

其法の由法藏村の古屋をあらはし其終のしぬまで
好く喰ひ可なり其終くくもて後終乃
産毛一面よ生ししり寛文の比よりし

此より鳥の嘴と生ず

江戸通銀町二町目と荒町とより高聖あり
八郎又山家の舖拾のふと子妻よ生ししり
く中り大獎病と多てはぬよ死るは
しし物終りあり物力少もく不思儀
のりよ生し其の根と生し一面よ生し

よて書入るくはしりし延宝の比よりし

殺生の現業を根の形とあり

上総國廳南乃妙覺寺門あり人数りし
るりしし或百姓十人とりたを合なり
書き入るしりよ多り久保田平ちりよ
のりよしり者くくし其を向ふは
んせまいりせし定しりまもり
入倡りきりしり多り目録
形ち瓢箪のくくりその形とくし居る

これ其が父了て所りし若き時鳥をり
細やうを所り申の教をせしや敷や候了
煩ひかく候ふ由會とせんを彌と記す
地いぶがられむ鳥れ籠いらくり申ておし
了とて喰い申りしなり

楊枝咽入りまらまら或す

寛文七子り越おれお断喜ふなりし人
朝の水はくんとて湯枝の舌とくまら
しものりし件の楊枝咽入り終り或す

け人ほまゝと臭酒のし酒とびてま人も
酒河せやうしとぬりしとて煉磨し
多りの臭の咽り酒と撥しと果しと
の終り也まやうとくまきりしにりし

貧妹締りて放て却て死す

寛文元年のし八町堀り辛奈菜の醫師
書とひくありと媒の虚言りやまらん
の女ありけ女隣の妹と申りしハ
れよりりはまばらて親のまもり

けしハ籠とくまて刻りん祇或すくハ小箱子
今より二十四時うこれとあつすも又籠のそと
活とらうず教してとくしハ焼初め初ハ籠
しよづの邦の西リ合とどくあさうしやよ中へ
しよ令のそと中つておれりてとあひひ定めし
ぶ教すんそと天井よまを纏とさけ挿とつ
あまひてやしくくおまのそと仕飛とくあが
挿とさくくくざくくとおがうはしすあめ女
おどろき声とさあれハそふ人合頓て儘とさく

あはれ焼ハ息とくぬ焼がふ大款と新てとあれ
とまひ下しおられむ只堪忍せよと後り
うや頻り新設せしとくぬ母ハ大款不
の者より令とさる籠くハおしへし罪愆
が活て君ハとくまはもつて刻りれハか
そのまひれむ科れがまかしとく百日牢舎
あまひし醫師ハ活体と云ひとあしと云
石版のよらうとまき書と親めしとあし
あまひとくくハおしとあしとあし

犬少之云やまのて娘と申報す

丹後多海の方ちのち去入京後丹後曾あの子
人なりつる時犬三足殺せと云申りしうばを
お流しのもや少く水とのむ難のしりも
物よ下の幸とてしそ如く起上るに月夜に
此のふしとて是れ少くおしし娘の七
月のあつみ越えて水とのしやまきくうらに
流せりまの死せし九とてなり

逢風家への食姥首とりしり

信州松本領の菜華とよふふとて者なり
この土民熊丈りとし今穀物と一升が
の二升とて新産もこれと家職マしと世
たりあり老女の母なりある日素大徳神見
の者少くはひよ二升とけしりうた山里の
窮民のありれむはのてあつて借との
よりの誰いむ者もなりとてに延室の
此のくありしが老女の母なりとて
まよと此家の何なりおれりありしめ候し

産婦恩をりては然のふに害する所

江州甲賀郡の山中にありてあり女産婦よ未の是
つやよおるるにふのゆへに懐く名ありしよふ
て産むるを然書りて女と名官よひきあるん
ぶと産しし一七日さして里よゆりてはた
ふハ然るまづくま懐てまやてつゆりし十安
とより病人とも然のま取つて取し一を
娘の云ゆりして懐くよふかきもんが女
病人とほきてしり然め居取てつるがり

件の然官よりまつる女とすくよ引取りては
まつ次述るせり恩をりて執りては
人よにゆりてと云ふ

梅濃吉と米の積悪

大坂聚米町と梅濃吉と米と云ふの胡椒印と
りよのや娘を仕立し程の大悪業あり大坂中
のあぢやの女代少者の親兄弟米の所りま
よも然るまづり取られ登のふ候りる所りし
丁銀板とあきくへおり子銀より今一夜

ちよと吉と兼て報しており隣の者壁の破し
よりうらむしむねを孫服給の血と何いり外
の末裔やめさうきゆ人な家主と云たらしくも
云ハぬの卵のりやいふ人とうなはるまは夫婦
ういりり素おりのめは所せると各々あり
吉と兼ての金と奪ひ新地堂論お何りて
兼てせんとして修毫し用意せし比少頼
第三たあいつらりおふ妻と離あしとるり
地の女天主寺と云ふて長吉ハ林徳

吉と兼て夫婦しと報し以骸ハ三たあ捨しと兼
書しりしは頼て公儀へ新ししお身孫同ん
と何の部地りしはりしと兼て吉と兼ハ新
曲輪へめおれむ吉と兼お日のおなりしお入出
吉と兼と捕少頼三たあと云たら相借屋と云
しおお借々のあつくの影と云しと兼て
義と兼と兼人ハ閉口しと兼て兼て獄舎し
ちりお骸と云まらひと兼てお初儀の四の
古井とすしと兼て頼ておらと兼て

是も愛せびありし金の由穿鑿行りしおまをせ
八十あるのうらぶらぶ根科梅りて古き糸ハ磔
やうと條の三人ハ大坂進級行りしおまをせ
古き超くやれおまをせしと新人ありて首を刎
らまをせし少狭ハ地の中子殺しとせし磔
やうと

狐の耳口とまをせし根闕の子と産
勢州日永村乃古きありとせし者狐とせし
昨日の親の忌日ありとせし脚ありとせし産

者我よりまをせしとて頓て耳と口とを打つて殺
しありおまの此を三巻一お妻産とせしに女子の
取らまをせしとて産しとて寛文十二年の
鷹の羽毛とせしおまをせし子と産
尾州勢田ちりま山崎村の者鷹と産しとて入
しおまをせしとて少し鷹の筆とせしおまをせし
妻とせしとて憎きやゆらとせしおまをせし肩骨計
しとせしとておまの女とせしとて産しとて肩骨ハ
しとせしとておまの女とせしとて産しとて

野の三行さんぎょう口毒くちどくと害がいす

野の三行さんぎょうとて儒醫じゆい乃な名世なよにけ
し人ひとありしは悪あくき癖くせきありて働はたらむ者もの
とす一ひとののみも虚うつろ鼻毛びばうくらぶらた
あやうらぐと敷敷へしと顔かほ出でしとわらわすに
大おほなる声こゑして叱しつらき作りし後のち京都きやうとありて
おのおののの小姓せうじやうと仰おほの悪口あくぐちあて叱しつらきもれど
そお都みやこ絶たえりて即すなはち三行さんぎょうと所ところ一ひと報はらひ
ちりど世よあるへり頓とん成なりと坂いさか新あらたちきりて地ち

非理ひりと牛うしとつらひ接触ていしよくとけりぬす

京荒きやうわら神河原かみがはらの牛屋うしやある時とき大姓おほじやうとそらに
牛うしうひりりしにけりありに赤あかぬきとそらに
房ふさりやとそらにけりて彼かへりてたす
今いま一度いちどゆきて問屋もんやよりそらに
あてまねりしとそらに牧童ぼくどう牛うしよびしにけり
多おほれど是こゝ非ひちきりしとそらにけり
ゆき件けんの帖ていとそらにけりしとそらに
牛うし大おほり荒わらいしとそらにけりしと

昔よりいれむと人何とてしるすそとや成し
世のまゝ、牛飛出てまゝ人々解之引くもて実穀
してさう

不孝の男士、死尸、廁より出
和州高市郡鳥や村、甚比と、六百姓、此のふ
母、不孝なりし、不孝の母、耕作より悔しし、
母、桑と、桑、一、君、うしして、そを飯と、バセ、びして
つ、物、さう、し、し、者、う、な、と、大、い、く、ま、た、あ、り
て、釜、ら、り、桑、袋、と、川、出、し、紙、袋、と、て、俵、と、

つりし、桑と、と、も、と、お、ひ、て、廁、に、投、げ、さ、り、か、た
悪、心、は、く、お、く、に、積、り、し、う、皮、癩、病、と、煩、ひ、て、さ
海、に、ま、じ、し、と、骸、骨、と、俵、と、を、一、に、不、潔、起、り、ま
走、り、出、廁、の、方、へ、ひ、ま、れ、ば、人、を、た、ぶ、る、ま、い、し、ま、て
又、り、と、廁、の、隅、と、う、く、う、り、者、と、し、て、引、合、し
て、葬、礼、と、俵、と、を、一、に、天、晴、風、ま、り、ま、り、し、つ、バ
つ、は、大、悪、人、の、成、り、し、に、あ、ま、の、不、思、議、あり、し
云、も、あ、い、ぬ、と、天、候、し、つ、き、曇、り、と、雷、電、天、地、を
ひ、か、し、つ、ま、り、し、つ、ま、り、し、つ、ま、り、し、つ、ま、り、し、

うしに成の付らるる小室をきしははるる
三に又洪水あり来り雷いうはるるあり
する所しりしは待もやしてはるるあり
たらく火やうもどりしは聖明灰のせよとて
ゆき入り又炭のしらのあつらして石の中
起つらるる居ししや又人々の毛ももて
薪大よりの積てやしくぬ二思て灰と
ありとらん

他財を撲死して後自害して歿す

いふ尾湯町一町目ふらやふと東といふ者順曆二
ひふ金七千両の全盡とてはるるを聖の酒の
の六がふつきを停止の位せかりの所して
これ究竟の幸なりとて件の金を撲掠し
てきて本利をうして千両の富貴となれ
矢室八子の八胡の礼をばるるをきくはるる
あつてはるる一階はるるはるる
人の財室をうらむしと今懺悔するなりと
をう、呼て左右の腰腹を刀で二三刺す

逃し居りてくねりあき傍て刀をのきこりて
しりて疵きあつて八九日して死す

貪賤の嫁娘類族刑とふい

京油小海の賀部屋壽幸といふ者賤富家

ゆかりて嫡子と嫁とどくくは嫁の粧ひ

欣して金二百両もちまりしこゝ後英方より

金五百両お持ちていふ人のありしとゆては

とやま又りやうけ壽幸ハ大欲をたのん

まかりしうは頼ていふのとよくえんと謀りて

しそつと婚れのみと究めやましと北太今の嫁の

二百両と六両んりの流石と傍りて是れハ嫁乃

乳母と下男とまほきいりほりて嫁に之を

衣の金銀をまてよたも何とバとれく小腰

美やゆせんともあやうよ云合あれば皆

うな断き本性のうしひりれと纒の款ふん

ひらきの後の災やもくもくは然状一あり腰

本中君の女まてまきうれは流りにあし合せし

何れ何れ乳母嫁の終りやうり何れやきて下男の

それを武彦燈の尾花の末乃穂よ出て習ひ
とめまじしや一可もえんらもも瘡りしを
ゆふ一衣二衣のやういハ誰かあつてもあつた
女ハ只飛騨やまきよ男のやういふ事しよハ
素世を河くくはれへと笑の中に計て合
笑くくくふふ声ハ娘ハ顔とけりめあ
思いよすめさるまきよや自と抱きやま
し昔ハ只一すに夫のやういふ心祝し
りや云教しふハはめよらまきよはあ
ぬ

り云るはまきよはひまハ八割ふせらま素世ハ
ふまがむも不寐のうき名ハ信すはぐきよ
しめ羨然何よハ男志のびまの隙と
りまきよはまきよのまきよハ女も入まが
小角と告に何のやハ嫁不我也と白
弊て飯しる親たはるま意趣と
初め来ぬ頃て清き女板金因防ち
しるは乳母と下男とと拷問よ
まのまに白状しあれば則壽幸夫婦嬉

乳母下男腰りや中君の女まであらず故に
上中下とひきつりし一確よりいふは
調取し一財宝ハおろりく彼嫁と賜しと
父と執し一属滅す

尾州清水喜系といふ者の子と伝ふ系ハお比喜
石娘と書いむへんとりしと親とてしめし
一族口とて海へ棄用と云し一かど更よ用るる
ありてびんりし一かく名し不和ありし親も
中よりきりりれハ夫婦にせ令せ朝夕の食外

餽ハ美味と嗜て親ハ下人といひし一くませし
父も堪忍し一かごとてかたは悪人ハ世上の足ら
しおせんとおひひそかに訥怖とあつめしと
夫婦のそのあつて男の惣を女とお孩して竊
り父と執し一あり源くかくすといふも皇天
覆る九バ一教の者やつと事と伝ふ系ハ佐腹と
きつとせ世間へハ自害と披露し一高岳院
たつりし一と伝ふよりうるもの楚忽よか
寺社より取へおろりし一則檢使素

自害するはあらずと 金義 変定し 鬘も同心
しりしものありりれて 惣妻父ふと 新尾内區と
成瀬 吉左ありしよと 志づくと 成瀬も五ヶ かの内との
そのハ 侍ははりのあきりふきよのあらずとて 様多し
位し 前を 別させと 此を 兼ハ 七と 志むと 志ふと
磔し 何ぐらと 此と 兼ハ 成瀬も 志ふと 磔し
かきよの 志 志すきりれと 高岳院より 一と 心
寺ふ入りし 尸と 出し するもの 叶はる 法式ありと
強し 許し ならまし ばと 出さる 志すきりし 志すの 州門

のたハ 心も 何と べし こそ されまに 括金も 志し
一族の 心く けり 志す 志す 志す 志す 志す 志す
と 腹きり 志す 志す 志す 志す 志す 志す
れ 史宝 七と 九と あり 也

新著聞集

智篇第十五

途と印、難と救い、藁と抜て、急と辨す

句と賡時と祝す

春日望の鹿の解とき

若人との討の方便

亀と活と

盗賊の別

巧智一言、教諭の難とす

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '智' and '難'.

牛乳を煮てほく

巢アサギ蛇ヘビをふせぐ

感かん隨ずい和尚おしょう悪人あくじんの終はつを化くわす

詠えい歌かをヤリりく

巧くわう智ち辨べんを解とく

官くわん家か獄ごく中ちゆうの死し尸しを紀き明めいす

兄あに弟てい山さんを巧くわう言ごんの解かいをきく

念ねん仏ぶつ繩じゆうの謀ぼう老らう父ふを教きやう化くわす

釣てうをほて咽おんふ入い

穂ほをほて咽おんふ入い

胡こ椒じやうをほてほす

碁ぎ石いしをほて入い

尾お羽うの真ま甫ふ銚しやうの言ごん傷きやうを療りやうす

途々仰々難々救ひ藁と扱て急々辨す
 武府大火の時餘烟すべし法塚内へさしひりて
 しうに余多の女中達へはさしひりてきかると
 ちうづりしきよし松平侯とのさとの奥へあがり
 きよひきとさうづりてあてられとさうづりて
 きよひと教られし様々一人もあつた下りて
 迹出急難と行がききよふとせし又大樹公河
 治めり位ありし時醫師主治灸点と奉られ
 しみ藁とさうづりてきよも免角内へさしひりて

武府大火の時餘烟すべし法塚内へさしひりて
 ちうづりしきよし松平侯とのさとの奥へあがり
 きよひきとさうづりてあてられとさうづりて
 きよひと教られし様々一人もあつた下りて
 迹出急難と行がききよふとせし又大樹公河
 治めり位ありし時醫師主治灸点と奉られ
 しみ藁とさうづりてきよも免角内へさしひりて

伊豆のまどの津おとまはたの舞せうくお一切
破く抜出ししききまきつれあらとるん

句と賡時と祝す

一條攝政兼良公十二歳よして清元胎所し時

虚空へ何もあまき比怪しきく急きて

猿のやしらよえほしきせりり

と笑ししは頓て縁のちよ走り出せし由ふし

え胎ハ赤れお田のやむじきし

と所きせきぬへるととんけはの清元のかを猿に

似るせきぬへるぬりとうや初き時よりや清元

お少へくし地著ししきふお胎世よ切く修る

雲日聖の鹿の角とまきる

奈良の雲日聖の鹿ハ古よりとるんと損下りる

少く民の患少くゆるし寛文十三のよまむ

儘にまおちくぬえおしゆしと角と切しと

るちれハ東大寺興福寺の僧徒神獸と換下る

るおえうしとと難儀ちりりしおおのち

しと角の者ハ角と切り人噉し馬ハ耳と割

とよる聖賢の控りとして八九月に於て稗多
小治きし切らせらるしけ角と切入りし海の
まの御多銘少し切り雑作あり若
茶より切らんよハ強カもねりし切り
今之切りてハ僧侶もわらわら悦びありて
ゆりし

若人との謝の方便

松平下総守の家申様井七、之無事なすりて
ま多しよ若人よせしけ人の徳にや

く地と神ゆりて奥扈従りめされし又成田
吉十郎とよ扈従ありし若人よりハ念ひに
ありしゆりてならわきんま多身ありて親の
七と忠しけりぬきまぬの無名とて狼の
ゆりやありてかのうしけり舞の口よりし
しくわいなる色にもおきばおきけりし
ま多身ハ戸多敷よりよと吉十郎ハ山形に
しが時とゆりしけりてま多身ハ
ま多身の云辭よりし親の心も今ハ

と海へつゞきつりてゆくと思ひぬ里せしる
習いぬれをそれより委しくまはさるる
池のほとり吉十多も立寄ぬれりしと
あしひきまどみだりしは人目には
茅もも五つぐも云く巻や菊一
まのむらり終へて君他出くさぬ
りがやまよお院にありて抱
のそと鳴出しるるや庭まてハ
ゆんたれみ侍をぬへ某そりて
海へん中て

吉十多と座へゆく也所をまてハ遠き
あつて三人の刀を握一腰と吉十多へ
圍のうし海へはらあまて日暮の意
立しうは吉十多も刀ハ振一
刀を拭ひ青取のゆり本め
どうを基取うり表つて出
裏門へ海へつりて出る
それど何にゆき通へり

表門より至りて裏門より入りまれば本に備りた
と云ふに刀をさして裏門より入りて裏門
より入りて云ふに頓て近所よりし松平
相模守をさして入りて下後守をもあて
改むしき自ひいそ二人の出づらざと云ふ
て致屋ふ人にてはかりしあるに今朝より
下といひしは屋敷中へ海くまをまわす
来りしれを吉中多末殿と云ふし松平守
不取為なりとて云ふ事議所ししめ事取門
に

いふも云ひ事多末殿と云ふ事取門
ありしりくへありしと云ふ事取門
方より事取門より事取門より事取門
まじく候と云ふ事取門より事取門
出しき事取門より事取門より事取門
かたは神妙なりし事取門より事取門
るは

亀火活し

本多強攻ちかく家来候初原系書めりしに

沼亀と喰セハ蛇とくまきりしてとるれば亀
辛りくを取めやめ産の比と殺ちし用の付
るま出丁く己くお赤とほまはく隠ま和
あれん人そ多くしよ入しを捜る海りて
やしく一ツニツらま出く既と殺しと罟へり
あま先病人はあくるるるりしみそれ次の
日より亀も地の付とあしくく罟し甲を
あししりうはくんに思ひ考るに己く殺り
べきよや知しからま又病人果て殺りま

きりどちしておぬるりし奇物なりと云はる

盗賊別也

伏見木幡の巧りりき村とあるに馬盗人
しと程へて捕へしに地の盗人白木幡一匹
本陣一匹アおらうしうないうらるあて問に
あまハ黒素柔毛よハ白きもめん白馬ハ黒
もめんと胴中より足まても巻也まとい馬を
追うあまりてもあ目ハ班とスあまきく視る
とハあきるらうと云しとる

可智一言 教養の能とする

尾州貴い公の納戸の金二百両を外あくらせし
うばかきうき寛ぎゆき大志をばりし仲引友
のつづらまびりや何とてむらゝぬ合庄のあく
むもればいりよしとけり地とまへハ小納戸の
あまの千多よりきぬりしとらゝる外持事
り多かりしうば今度の料何へよきりやりて
志水たあふし四歌もよしし寺尾古作も柳と
してたあし永く世歌ゆゆ多くしとて則ち

りあふしうりまのし古坊あゝ一鐘のあに
きくしあまハ名もす世持のよまといふむら
あしあへともよび人あれがぬすしゆめえ
まへハあゝま何とてゆりしうば頭て内燈
よきすくめて自害せりしゆも大智の一家
ハ安堵せりしとらんぐ後抄五しあゝるい
あゝる民言あゝる悪名とてあゝるハ一おの士の
ゆりあゝるしとらり何とてあゝるゆりよせまゝ
あゝるそのあゝる實文十三子の其のあゝる

判成とてしるしに

所為の蜂は笑人のもよ上田のまて長谷川
攻めてあんなにわたりし門のたつたを
これの所を判成てまて不審しくおのし
例よりまてまてにのみ判成て揚てつて
とらぬはとらぬとらぬとらぬとらぬと
門をまてまてまてまてまてまてまて
胡麻とてまて具種業舎とてまてまて
ひまてまてまてまてまてまてまて

ふまてまてまてまてまてまてまて
我んまてまてまてまてまてまて
あまてまてまてまてまてまてまて
あまてまてまてまてまてまてまて
て件の中てまてまてまてまてまて

菓名蛇とてまてまて

下京とてまてまてまてまてまて
アアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアア

内へ飛びし。頭で喰ううそのも蛇まきり
 葉の口へはくしりてすれが殺せり何ん
 口へくくして葉の口へおれんやのまく蛇
 るふくくしりてすれ一人のまきに憎
 するのにおりひ蛇を殺せりし葉よりの
 ぼせしゆりてあれせよれん蛇の延宝え
 どのまきりしゆりてあれせよれん蛇の延宝え
 ぢりゆりしゆりてあれせよれん蛇の延宝え
 りりしゆりてあれせよれん蛇の延宝え

感隨和尚悪人の終と化す

は日本格ちくくには有福のまの後世といふや
 ちくくして末期ちくくづきくかど更く称名
 ちくくもなるとし 感隨院感隨和尚を招き
 條院とすめぬんゆり一家奉て孫るべし
 和尙あつしゆりて病入らば書子のまの
 ちのまきりしゆりてあれせよれん蛇の延宝え
 ちのまきりしゆりてあれせよれん蛇の延宝え
 ちのまきりしゆりてあれせよれん蛇の延宝え

ともかく一途に病人目と備へられぬ嘆き
ありきぬ一扉風うに吹くやき香ゆか
ひらひらく一病入ねどなきよゆい
あはれその方書ふハ頓あして
ゆきくろ光ゆらう丁七一財宝も忽細
て清美く一ゆえ一を瘧てはるのまき
くやく念ゆ一と進つるよと病く
と病くまふくくすく女一病入
病一余まうくひくく一西
方と願く一

と病一と他和尙の方便賢かりしと病人感ぜ

誄哥心とヤリ

將軍家光公の中流通村に
たきゆ一ゆきま一
少く容易く武家
ゆきまゆきまゆきまゆきま
あゆして三のゆゆゆ
ゆきまゆきまゆきまゆきま
ゆきまゆきまゆきまゆきま
ゆきまゆきまゆきまゆきま

いふはく都上河一入るる

巧智年と解

何の浪人具是や質物よとせき質やと許す氣
の操いさうとせしと銀すれと利にせし
うは類て氣せし生捕てそのまにけし
あれは我とけしすくすく堪忍すべし
公儀の許すしうはあはれし件の氣
松金修明のまじりしに質やく
徒よのまじりしは先とれはかかるる有の

宿也 昔はがきりしとせし松金修明
はては後のおどしとせしと松金修明
人かんどもりし

官家獄中の成尸と記す

尾洲の町なり松金修明は
七郎もくくしまりて籠死の者ありし
當職しきありしときあひりし
りしと七郎もくくしまりて籠死の者ありし
角よにりしと七郎もくくしまりて籠死の者ありし

はれをくくるとも物かご切ぬるぬりすことなる
よみあはるる娘とんぶりの娘とまふはけりとき
兄うきお物りち果しして長つちまきかまがゆのゆは
けふすはて我のたいなる娘はさうあいらすも
優す海ぐきせしつるまひしとかの者おなじに
つてまゆり守とよびはしよのまごつるぬれ
し殿の公やくしそあまき物かごつるし何の
益つるんとしよあまきまごつるぬれとやわたりし

念仏纏の凍老父と教化す

撰州(しんしゅう)池田(いけだ)ちりき、栗根村(くりねむら)の新(あらた)なる父(ちち)若(わか)く
若(わか)く別(わか)りて隠(かく)れ老(ら)せしとて後(ご)世(よ)の及(およ)ぶ遠(とほ)く
くうもさか本家(ほんけ)よのまきりまひるの郎(らう)あ
あはれをせ下(くだ)んとあつひのひと新(あらた)なる
作(しやく)のまひるのひとつるの用(もち)はつるのりかゝる
悪(あく)者(もの)して念(ねん)仏(ぶつ)纏(まと)も葉(は)まて然(しか)念(ねん)仏(ぶつ)
て細(こ)纏(まと)よるせが珠(たま)を費(たか)ふ文(ぶん)とぬりて
はまれぬよき隠(かく)れ老(ら)せしとて今(いま)よりまは
纏(まと)てのがまひしとて念(ねん)仏(ぶつ)よるまはぬる

かも花向づく陽にほろりしあうし右の代八百
文まひりきりしを總もよりぬもきとゆがま
しゆへ八百文まひりしとゆへはむかひを
うもぬもくおもゆきま知識ししおひも
まもゆきしとゆへしとゆへしゆへしゆへし
今度ハ案まひりし結つる金糸はこれゆへ
ゆへし金糸の貴き味とゆへしゆへしゆへ
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし

釣の咽よみをゆす

つる音まひりまひりしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし

穂の咽よみをゆす

ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし
ゆへしゆへしゆへしゆへしゆへしゆへし

胡椒よみをゆす

佐久男 勤を多く 孔息 巧の時 胡椒の粉 鼻
よめう じやんで 絶死 せうけい 巧の人の
油と なりし 入りぬが 獲生 巧りし 巧らう

藁石 鼻 巧り 入り

巧の人 たりぬれ 藁石 巧らう 鼻の孔 巧
が 何と 巧りし せも せびりし ぬ 紙より せし
一方の 孔 入りぬれ 巧らう 巧りし 巧らう

尾州の 真南條の 食湯 巧らう

尾州 名 出 屋 巧りし 巧の人 餅の 油 巧らう 巧らう

食湯 巧の 巧らう 巧らう 巧らう 巧らう

せし 巧らう 巧らう 巧らう 巧らう 巧らう

唐人 巧りし 巧らう 巧らう 巧らう 巧らう

巧らう 巧らう 巧らう 巧らう 巧らう 巧らう

し 巧らう 巧らう 巧らう

